「聖隷学園聖泉短期大学 人文・社会科学論集」の創刊にあたって

―― 岐路に立つ短期大学 ――

聖泉人文・社会学会会長
足立忠夫

聖隷学園聖泉短期大学は、一九八五年四月十日の第一回の入学式を以って実質的に発足した。開学に至るまでには、経営主体である静岡県浜松市の聖隷学園理事長・長谷川保氏以下の方々の多大の尽力があったことは言うまでもない。しかし、当短期大学が所在する彦根市市長・井伊直愛氏以下の市当局の方々の、また、滋賀県知事・武村正義氏以下の県当局の方々の並々ならぬ財政的かつ行政的援助と協力とが開学に導く大きな貢献であったことは、看過されてはならないであろう。しかし、さらに看過されてはならないのは、高等教育機関の少ない湖東地域における大学の設立を多年にわたって志され、巨額の私財を「聖隷」に寄附された大津カトリック教会の山田右神父の貢献である。その意味において、本短期大学の教員を中心として「聖泉人文・社会科学学会」が結成され、今、「人文・社会科学論集」を創刊するにあたって、まず、前記の方々に深甚な謝意を表しておきたいと思う。

周知のように、現今のわが国では、短期大学は一種の〝危機〟的状況にある。英語の危機にあたるcrisisはギリシャ語に由来するが、その古い本来の意味は、人々が自分達の直面する二つの重大な道を識別し、そのいずれかの道を選

択することにある。今日の短期大学は、学校教育法の「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」（第五二条）と規定するような学問中心主義のアカデミズム（academism）への道、具体的にいえば、四年制大学を目指す時世の滔々たる動向と、「職業若しくは実際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的とする」（第八十条の二）と規定するような実技・実用主義のプラクティカリズム（practicalism）への道、具体的にいえば、専修学校を目指す強力な動向との両者から挟撃を受け、重大な選択の岐路に立たされているからである。たしかに、学校教育法は短期大学について「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は実際生活に必要な能力を育成することをおもな目的とする」（第六九条の二）と明確に規定している。しかし、この規定を前記の四年制の大学と専修学校の規定と比較対照してみるとき、誰でも短期大学の中途半端的、いや、むしろ曖昧ともいうべき性格を痛感せざるをえないであろう。あるべき姿を画いた法律にして既に然りである。いわんや、普通の一般の人々の短期大学に対する現実のイメージにおいては、一段と曖昧なものがあると言うべきであろう。

この岐路に立つ我々の心中を率直に披瀝させていただくならば、〝唯逡巡〟の一語に尽きるであろう。しかし、多少の個人的見解も交わるかもしれないが、教員一同の共通の志向性は、実技・実用主義を重視しつつも、同時にそれと矛盾するかもしれない広い視野をもつ人間の養成という点により大きな力点をおくと位置づけることができるであろう。その意味において、本学は、四年制大学に匹敵する、いや、現今の四年制大学が実技・実用的な専門課程への準備段階と見做して一般教育を軽視しつつある傾向に注目するならば四年制大学以上に、広汎な一般教育を重視しようとする。しかも、その一般教育の重視の根底には、一段と私の個人的見解が加わるかもしれないが、第一に、ソク

ラテスの「汝自身を知れ」の言葉にならい、自分の何ものたるかを正確に知りうる、とくに自分の内心の矛盾をも正確に洞察しうる自己内省力（self-insight）、第二に、他人と共に交わりつつ他人の何ものかを正確に知りうる、とくに他人の喜びや悲しみまでをも共に感じうる感受性能力（sensibility to others）、すなわち共知・共感能力、第三に、偉大な先人がそれぞれの優れた自己内省力と共知・共感能力とを活用して自分や社会や自然について語った業績を学ぶことによって獲得されるであろう広汎な理解力（comprehensive faculty）という三つの能力において、教師も学生も向上すべきであるという一種の共通の基本的な視点がある。そして、こういう視点は、アカデミズムという言葉がプラトンの開いた学園・アカデメィアに端を発することを思えば、アカデミズムの本来の意味に最も近いものであると考える。

もとより、我々はこのようなアカデミズムと実技・実用主義との調和、あるいは、両者の同時追及を簡単容易なものとは考えていない。それは、まさしく夢想に近いジレンマ的難問だろうからである。しかし、本学の卒業生の巣立っていく現今の社会と、そこに存在する企業以下のすべての組織とは、単なる実技・実用的人間のみならず、ときには、それ以上に、時々刻々の変化に対応できる広い視野をもった人材を要求しているという事実に注目するとき、この視点の実現はいかに困難であろうとも、単なる夢想として葬り去りきれないものをもっていると、我々は確信している。しかも、本学は、当初は国際関係の大学として発足しようとしたが、種々の理由から英語科と商経科の二学科に限定された経緯に鑑みて、優れたアメリカの教育専門家を招いているのみならず、世常の短期大学よりも遙かに多くの若い俊才を一般教育担当の教員として擁している。加えて、「地域問題研究所」を併置し、それと不可分の「滋賀地域問題研究所」を発足させ、地域の住民の方々の御協力を得ようとし、その成果は微々たりとはいえ、既に見るべきも

のがある。

これらの事実に勵まされて、我々は、一方では、それぞれの専門・専攻の学科の関心領域に精進するとともに、他方では、個々の専門・専攻に特有の伝統的な接近方法や視点に拘束されることなく、さきの共通の視点に立って勉学に努めつつある。そのために、月に一回、一般教育、英語、商経の学科的所属に関係なく全教員が参加する研究会を開催し、様々の視点からの所見や批判の融合を図りつつある。また、第一次大戦と第二次大戦との中間の「両大戦間」という、古い世代の教員にとっては自ら体験した辛く厳しい時期であり、若い世代の教員にとっては第一次大戦の惨禍から何ものも学ばず、しかも僅かの才月のうちにそれを忘却してしまった人間の悲しいまでの愚かしさを暴露したと映ずるであろう時期を共通の研究テーマとして、各人の専門・専攻領域から当時の状況を顧みることを通じて、共通の視点と共通の成果を模索しようとしつつある。

これらは日本の学会全体からみれば誠に小さな努力にすぎないであろう。しかし、これらの努力を積み重ねることを通じて、新しいアカデミズムの一粒の種子が、この近江の草深いが景勝に恵まれた稲枝の里の小さな学園に根付くであろうことを信じつつ、このささやかな論文集を世に送ろうとする。ひたすら各位の今後の御鞭撻と御叱正を乞うばかりである。